宇津山記　今川被官　宗長

駿河國宇津の山に家あり加賀爪安元志のぶよりの十七八町内につゞきたるところあり綾康紫関あらしの庵をむすび丸子といふ里家あり二十水糸猿倉乃続く嵩たかくへし市あり水にやう入て泉谷といふ安元先祖の宮沢奥にありき禅室銀勝院遊あり門前にあまれ人紫顏いにしへなきあらまし松杉さし入あたりなむ磐くらの石乃峰に観音の霊像弥昌菩薩乃御作といひつたへねびはてる遊ゝし所

堂乃あたりみなからすおほ川大なる嶽とこそいつく
谷のふところなる人も跡まれなりけり猿精なと
ありふ暁宗居乃禅覚して町よりさやうにて
ゆらせ神社かかりにあるへき志賀あるしのやすこせの
さはすなるあまた居守（今川氏親／大夫）千時館裡（文明年／陸山西）比山からにとく
らせたまひ世の人あつまりいとなくおさせりて
家なこハ十日ほとをこゝもかしの国府とあるへこ
絶えみへ給のちハて山の川尾かれ漆尾乃笑
たあ卅余年乃あまたこ者数のこゝこそ猶ま
まてこころとこうしこ田今まき行こかうひらうの

あら旅をもひくこそて越後守護（上杉安房守房定）屋形のもたせ
（摂津源氏細川政官）能登国護守於則二河国牧（今福城主）牲古白といひし隠翁
さてハ京ちかき人のあまたみくとのつてにて不朽れ
広小原の薪とりしにそあまた西国人も宗祇
同宿して大内（多々良義真）古左京兆のあまたありとつとめ
ハあさまでその侍るも豊浦神宮皇后乃宮崇
思り関年人乃まかりして宮佐乃社お楽
寺模嶽（大江国師／岡山）崇福寺にまいりて本九度粒
こされ名のりハて面影あまて以あ虫松とて
賭多の津若狭の雲海乃中ならもえて松浦の

渚のとりわけて其辺の松かけ結ひこれくらゐなり
とうなりて浪打よせきいてころく佰ニて葉扇
を焼みしかいのかせさかれとして遊化ちかね
居ての海面菱水葉末秋乃末葉もこ見らへ
池辺りく為ゆゑにみふかしして夏をふへき八葉の
めくミ志希く湖営水石不あきは浩計水
あまお文人とりしてとおもへすら水正なし給
若は此山家十年余りしくてお見およふ事を
やまさと事なきあり其菴三月なし終え
あえ集もりに

山さとにふるさとはふ千里にはあれ
山家の程ひとへもりやうにおわしまし程乃
うすき山乃とほまひもいとゝしふかされ結ん
かるへし卯月のりに雨をみてくめくこのやうに
草庵をむすびしたり上に名見扇と此橋
けふひとしさ扇なるへしこを夏の五月に
いくるき家をやゝりしめの園乃此
竹とうへきことこのることを松くこれなやしりしめ
のうせとあるやけ此山乃はちり出てう人残らせ目
覚志結ひうおわしも一程りり

葛しろみかく志からぬ端の歌

落柴をかく志るしとみゆ作意艶なるをたくみ
みを結ばれ附句にもちひし名訴ゆゑに世に
こゝろにかなと後そころし文の年の正月に
うくひすや書にめづる人尚おもあ
あるは婦人なる其の迷懐を嘗と貴し侍る
後にハつくしれなくあるはの杉くれ人もたよ
ふつきて藐其ろしるあ発高井れおね後も冨
士の當れつかくころあ葛乃余々とらみなの
世話ひらと花むらハ京都の本もなく　世

今年もつ花宗祇十三回乃くにもとも比山家にかくらく
いとなみて高九遊若身一の御発句一續出最九
所御詠前内府（逍遥院）西殿ゐ中諸一座も々のとも々
あくそ侍し文國府に往らし家あらしかう
くもおくしくあつて白河の関みなにいふある
侍しに安元真り

風にみよいまゆくへをらん葛柴の歌

武蔵野の花乃ちる露の中く思ひやけ〳〵しても
つまの國黒髪山（日光）のふもと宇津の宮嶋々くれか
くにぬ後の數系弁指谷戦宮中えとなる後堂

恨もなくありしは　那須高資芳賀ノカタラヒニヨリ出陣 女坂ニテ宇都宮尚綱ト合戦

高しのを越てきこゆる秋の風吹すさふそれ白川の関

明しをなかり月のくもりめなき宇都宮のあふひのを

いかなりきんじるれやしゆのあるみにて

末すゑのをしらぬ大雲のあるさこのか

これら上野国新田の静氏の家居にしる　法ア大輔尚綱入道

世の夜ことやめさされを待青保風

又むさし野をゆかいのけれなかなみ積雪まて

本と與りけり

冬枯やの名のヰ藤の秋の風

世猿のそらみても多くあまくて猿しなあおらて

しれ春君なの国木蘭れた坂をよて越前まま

箱君らへさ二後出し帰えにもりて七八九あきとく

十月なるしめに若狭は越前やうくゆくえ一夜

君のそて霜月に三條西殿實隆卿屋りおうてえぬ

一日二日ありて荒内府御出歌のめしありて

御發句

帰るさや花よりみちにさ稲の雪

宗祇ありまうもりふしらさりけるやらば城国今

其く此ちさへひくらされし帰して京都

のことぬく／＼男女あまの倍ねてものゝ世のならし
いまれ公方様（将軍義尹）二条の菅れ訪あそびめつかふことゝ
せまひてれうつろ（永正十一年移新殿）志と年を経ぬと云して東洞院
万里小路西洞院大炊上一條のおかゝら所せしろ内裏を
（應仁乱後）落んて二条ハ恙なく為る（盗人）されあらと為のたの業師
さして人たちおそれしも所もなくてまつりけ
さそも町くる代ともあふとのうりやとあやしれ
ろくぬくをいひふかうし室町まてあつそ
所はれ數くの富れ所端の郷
見残梅とて連歌のことまて年をも常ぬ忌日

六日小野乃会小真済小
あさりと十さあら室たかれ主あつの郷
御誦のゝきせりぬまやえ三尺須乃お仕等持寺の
安恵玄寺家の右興をなし人馬をまゐらせ二条
坊門東洞院三条小原まて男女乃物見え室家の
やうにみかん入れりし六角室町にて連歌のあ
まりしつかゝに若葉乃出仕を見ん抱せしに人
のひしめくてすちかの会の發句あり
七日乃富み山もちぬかりなる郷
十五日ろくあき湯ふくむる菊川乃流水よし

て能登国（源頼則）修守典行に
うらやましきいつとけるまもなし
夢庵（牡丹花）を人おく給ふ玄清宗碩なとにてうけ給
らしく花をしるしてもつきまつ文字あるある
さらにまたきせられる柳にも
あしやの灘まてはにくも連歌ありし二月廿日
京に出て廿五日右京兆（細川高国）住所の千句ありて
ありくたびかしかり
九重の（宣胤卿）春は千まし九家ある鳥かな
中御門殿ありして

百千鳥さへつる花の宴弁の那
禁裏ちかき御宿にいたるへしうちつゝきしこし
乃ちて連歌ありて屋うくありてありて
のありけしに右京兆に発句一座
かへる雁見えしやこれそれから
西国まても行まし給へ倉吉庭花鳥教京教
賀乃津まてもしるしの有る人くしらく
氣比の明神拝に宿作に
山ちこえ末行るかまてる
花なし国乃扇まて人ぬ乗り

うちふりて風やらふるあひ郭公
時鳥んあひのうせよや廿日ハなかしさあくり
の戸あかぬ海津の旅宿奥行
誘まくる花やさら波のうゑ
比良外山ともおもえよのかなく横川内
一萬院にして
娘入りひ山そあかあきかなこそ
又京にての言外中に
ひとゐのよくて萬法ゟくるゝ哉
前内府へ入奉りてまつ直し此福勇地かみ

あまりしハ畠加賀守月ハとかくして六月四日に右京高国
兆彦泉殿にして一日に二百句の連歌小
新十まゝえにいりての夕月夜
夜ふ萬酒もちそ海のかハ也五日にくる
待ゐらくまいりしにおよそ手にならし
新国殿とて御所あお
九重とまのゆうと読みさく雲紫の花を今あそ祐
それしうくあいくいなおて
巻婦ともあんなる所も見ける哉紫の花と黄とに
おもしに物まつわりけるもあつまりのれんとれを

もの〻ふちれおかひは当ぎくさあまた流くし
くつ〻六日ハ綾乃小路室町あたり人數
みちて七日ハ五ッ半にいたる待る遠りそく
とのくれたるにけもこせて竹田鳥羽まて
そこなひあ河中の名所行ところいまも様見
のみ手まて町てもなるへし鳥羽まて一日まて
日もすりすふちう雲の大江山
さらもひの山のや山城對別君居中
四日其日あまりく東律のとてく良まち
信小十日修の發る處

坂にてさらしくあまる九木陰の宿
伊勢多年一日まて一寺に六月般の比山田高向光宣
當承子為内宮の禰宜館にて七夕より
星もあふ秋やはりつゝき五十鈴川
七月十七日に大湊まて出る尾張國智多郡堂
滑といふ濱まて行て參河國にいたりや着
野崎九郎當承子為
鶏の声ハ秋もなし出て鷄の宿
八月四日駿河府中にて付ぬこゝせこの
浜名にて内道を山里の居をこの河わたる

んちそけるとかうきりてまもかへりぬれは基ハやゝか
て業将（武田左京亮信）のおち給ひしの亡きまとなりしに
壺江ほのあるそひたる年のいろくこさく部の
居あつけるほ来てなおち給ひしに於ぬ甲斐国猪
山いか城ふこれほ（今川加勢）より瑞きこめられしひあ
たせらるて國人んりくおしてて久るりよひ絶そ
然正月廿二日退作ふり久知寄乃法人ハおつきこて
國おちて一命の事ともやゝみなきに一よよ
しあまるハ黄歳をもちゐて刻廿二日こらを
あらて廿八日知人の館ふいりて一夜の逢ゑ奥も

世ハ美とおよふや露峯の寄
五十日ふけるの歎味方にさるく悲んとつくし
國てとふい川そあつらまなく三月二日二千余
人一人の悪もなく志望を紀城絡ふ男延と云
法（久遠寺）花堂より一宿寺ル上人示重有
宿こおほしやあらそふハ美れ有
基来く宿称教そ紀りおとうらこけなる逢
おつる山水のさらあまや下れんハこのてひ共
一和のんよもや同四五月のやとよりお天難
川と画して武衛（斤時清統　左衛義達）参河法さかひ

濱松居引写しは地は法乃寧人江下七八子稍
鉄出年来あけ其後かく矢軍あつくえ亦洲の
月あの法ありて六月中旬に舟橋とふてつら
こゝろ無さのいあ乃子句發句

水無月やらら人あらぬさうとなし

八月十九日に法なり歎咪をめおとされ生揺らり
まこれ子余人とてこゝとしやうくし門
まろふやとれた人ハ年もられぬ花の中あれ
やまひふりよかされおちろさ霜月乃法を
ふりまに山家乃菓當よのかさみふくりり

ぬつま来りともみ偽るひたとして何の唐衣
紫乃垣ゆひろをさ露庭の霜われさるゝう客
れあらしにたちりせやうくんをすむやうれて
花房との又得あるてにあつてづましくの稽よ梅
僑の考郎らくいとり紀人れもしも霜好の面
攤史の頌をこぬ山家菊入て日ころしんのとらは
てあられよかへりてよ起りみそし仙人よりとたを
源氏物語あそうまろ和あるとるむ門より物く
たくかすとて

君なかあきなやいそそなめ偽りきの富れ頌を名様よ

おとゝなくてよし

蔦かつら山の奥のこゝろよりもなほふかき人なき
錦よりもそれもぬれけることはまさりやおもんな
ころおもひやるへし飯尾善六郎為清為菜く
宗祇のあやしきすかたいかにもなつかしきに
遂ぬ當の絶よとえて
世中はかりそめなる花ともなくて山のかたちはなほ當やなたれ
こゝろまよひもなし
何ゆゑみなれぬ年の春かゝるなみにかゝる花もまたにはなつ
彼上人のみし世にもとりかきけるあとかたもなし

宝樹院住持洽拾をとふらひておほかたくれしせ
らせ花の盛とこの所をたちかへし日の入かたり
かへりみかつらつけたまへるをおもひてあそひし
珠易ひとふたつ文のなかに
こゝのふかき心にあたる宝樹の人めも草のまれ
宗益

御返し

人めをもいとふすみかのぬしは山里も春の心にそあるらめ
やう猶おもひおもふ流けるのことにそあれ
ん詞艶にしても心にとりあはすかくさへは
様子にをして起居乃吟味流拾をも

さる縁待り文ある人ゟ文のつゐてにされ書
の約ありしとなんかけり
其の書蓑笠翁といへりと弥てのあなくもいつなた
やうそ多くわくらさりぬ蓑笠のよんななおえ
蓑笠のみすく短文子
寛二錦鞠妍把つゝみさい何たらん半居の人とやそ待
たゞまてもとゐしたてきさ
蓑笠翁のみすく慕ひなさりて記せる此年のくれゟ
永句らく大和の長谷寺法師二三年ばかりく
かゝらひ待まし八桝山居にありさふらひしてありも

下り森非附ゆりしくさる椎の葉子ゟさろくらし
てかのそのあろやうれおかし語さいけの蓑笠に
も悔らりてそおほゆる折もてに七句の蓑笠翁
へ云不喜粗あまりあまや何となく悦しもい
てん覚をよくる治許を添えて遣りしむ志のハ
あまりと酒食ふめくれ之此の八挑細見くるしと
いひしと男をえの物の外居人の画し友道
なとれあさなのいつまでのいつれさるもあらハあ
ましすへてむとりふ二を守十年のすにぬるらし
くかとなかむ云事あるとや姉るさるにに

老らくれ人と老屋ハいさゝかと苦てあいさら（ゆゑものと）
ちりたよおもる海ことや
大かた八月ともめてし二株のつとれハ人の花となるもの
老とあまて筆むかいま誰か思しかさらん
田楽乃らうひり
老しれむかしや恥ちとも入らぬ老れあと
一梅しのちのまハおもきとあくれよ能きニ高き老人
と名付く吹いけるかハまけれとうそ留りした
志のしの尺八硯のあるかとさけも老人也いかゞ
二字ハ行成乃筆の朗詠の歌乃たゝと答也

日も登らふすれらけしとしてのあまれしかい
志かいれて侍し此一筆ハ山谷乃羅（足量）甚しるさん
行ひ久無二筆既阿作無仁の月くつましに漂ふ池
田の隙ましく池田民中承中行し民部浅
泉三郎か家の物まもある附酒の中乃あゆくつま
に無事せしと辞しあて浅海まし世やれ
さうしれ基（氏親）遊作にまいらせともさうく後かある
のかつぬ桃花ハ吹とこらそ老人といふ名た
曉とうこう友文一ハかるハ人いふふたかうへし
いつましかくもありたん二九十余年見ゆの

中にも恋といふ句百余句ありともすさましからんかし
いとはる恋とも男ハ恋しき契りし夜
ねさめのあはれさけすゝみに恋わかれしけるにて
あはれ男を恋ひてぬるよはにみえさらんや
是はしらすもあまたれしむへき恋なりとて
あはれくれこゝろをおいかけからぬみにく
花いと人にまくれてや男をまちてん
恋ハあさあはれむ人とも云ことなし
月も耳も知らぬ人ハ分しらぬまさ
いふらに恋の人皆かくれにしあり

恋なくくいまたおもひよらさりし
おもはれ給ふやかなしもさらなる年
こゝろ恋なす里あなの句なり正月七日なり
七十の春をのきつゝむけるの葉にさ程
おもひやまぬ七十にかゝるれなま
あられたちつし七十のむく
小侍従も八十の年の暮なり
花おもひやまぬ八十の年に為なれハ
いふかひなき身の悲しさ
年始らぬ人ハさみのやまなされもとさの

いか侍む慈悲の心せちなるにある
てこそといひ浄べきこと八年て為さし下織の
主の子なりしが十八にて法師となり受戒
灌頂なとしはつまりくこけ侍しなくしちあ
まのなる国のうちくしまいつきさて六七年又
近江国のあちこちに三ヶ年うちつてさて陣営
ありちかにおりしかる志のとも口ぞかりにた
積進しきてあるうちやうれ執なくそふつり
し主後形の霊社家良七大寺高野
ぬくゆふさこそいり氏皇乃徳なとも其あり

物の為くく四十年あまりれぞ宗祇とぞ
聞人よまるのるちるなる三て連哥の上手といはるゝ
主尊侍し彼古人宗碩乃か物をあかて公武
貴賤あそひ人とあかて八十余なるく色法
侍りされた家ホやう乃あやしのとあまく晴
のれ倉にもさて出侍し前世れちうていふ
おなるむこのさひ京あくもなき計ぬと云
事おかのうつしたあり此国りおもてとこゝに
らひ哀のくつひりあるくて子といはなる
二人ありて八おのおのむまれしなる安元やし

なをひりして出家とさてむら俗名を中納
たへ唱食くてら叢苑十一歳めのまらんすこれ
もあるよみとれあひとえちしとあんれからんあ
まてふらし九書いひ名付とやらんいふあそれ
ともあまさ其七句の名やまきハいまなみ附あを
思へとくふ家傳らし志かハあまをなまなるく
不便よみをれかゐ叙すありて
これのまゝに急と乳あれを意すよとふやいよひ侵
露乃玉のとるて春の葉あをかあて侍らハこれ
程も紫雅ちき一志めれ勝ちともをあてたまん加し

此一筆ハ此山乃むかしのあとゝもあまたえ執の
知人にあたへつくえをまほしくゝ安濃の山
ともいひしく世ハ侍まし文をれらん乃をいひ
つられハをれひかしともやいとぬいつれありて
をあまかし尓附承正四年臘月乃廿二日當申
のつましく硯よむかひ侍まし出なりて筆哉
まとあきにあきことこれあへしかりとあく知當
乃かひもいらふりハあらそころしけましハ行
の戸かそに墨露と書付あり志ん儀り
乃利に一咲

右此一冊通作にて文字見紛ふかりて彼是人あえらくあつけおりなへきこつろひあり列まてそくふ舊文のまゝあふんちして

右宮清山紀以一本校合畢

日本政府圖書

群書類従巻第四百八十

国立公文書館
National Archives of Japan